

徳川齊昭と伊達宗城 (十二)

― 補遺史料各種 ―

河 内 八 郎

前々号の(十)に収めた安政五年六月までの書翰で、徳川齊昭と伊達宗城の間の往復書翰は終る。周知のように安政五年中葉は、とくに四月二十三日の井伊直弼の大老就任後、決定的段階を迎えた、將軍継嗣問題と条約調印問題での、幕府中枢部(南紀派)と一橋派との対立の中にある。老中堀田正睦が上京、参内して勅許を求めた日米通商条約草案は、再度幕府中心の諸大名の合議を求めた京都側の意向に反して、井伊の判断によって 六月十九日に決断調印された。急挙登城してそれを詰問した徳川齊昭らが、七月五日に処分を受け、齊昭は「謹慎」の身となった。その結果彼との交際、文通等が制限され、そこで齊昭と、同じ一橋派として一橋慶喜の將軍擁立を運動していた伊達宗城との間の文通も途絶えることになる。

ともかくもこれまでに集め得た齊昭と宗城の往復書翰がそこで終るのは、単に史料の残り方がそうである、というのではなく、右のような政治的状况の中においてであったことには間違いない。

將軍継嗣も六月二十五日に紀伊家の慶福(のちの家茂)に決定し、七月六日の將軍家定の死去(三十五歳、発喪は一か月後の八月八日)を迎えるが、その後が続くのは、いわゆる「安政大獄」の時代である。安政五年十一月二十三日、宗城は致仕、遠江守を伊豫守に改め、藩主の地位を養嗣子宗徳に譲り、退隱する。

弘化年間に始まって、この安政五年六月に至る、斉昭と宗城、ならびに水戸藩と宇和島藩の相互の関係をたどって来たが、ここに補遺とすべき何種類かの史料を最後にまとめることにする。

第一は、弘化以前、天保年間の書翰である。天保十（一八三九）年、宗城二十三歳のとき、斉昭長女賢姫との婚約が成立した。これは宗城養父宗紀と斉昭との関係からであり、そして宇和島伊達家と水戸徳川家の深い縁故の開始といつてよい出来ごとであった。結果的には賢姫の急病死という不幸な結果に終り、宗城は翌天保十一年七月、佐賀鍋島家の斉直女益姫をめとるが、ちょうどそれ以降の年代の書翰が一点、まずここにつけ加えられる。これを加えて、斉昭と宗城の交信は史料的にも以後二〇年間に及ぶことになる。

なお、これまで主として宇和島伊達家の現蔵する文書の中からこの往復書翰を編んで来た。斉昭から宗城への書翰は、当然ながら受けた側の伊達家に残り、宗城から斉昭へ送った書翰は、原本が残っているとすれば、当然水戸徳川家（彰考館）の側にある筈である。しかし、水戸彰考館の側にあるべき原本についての調査が十分に出来兼ねる現状にあるため、かねて宇和島伊達家の編輯所で水戸徳川家を調査して筆写集録した写本の稿本を主に利用して来た。しかし、彰考館現蔵の原本文書の確認できたものについて、一応まとめておくことにする。なお今後の調査を期したいと考えている。これが第二の補遺である。

そして第三に、水戸彰考館の文書の中から選んだ、天保十年、伊達宗城と賢姫との婚儀に関する史料である。これは、前年天保九年十二月、この婚儀の多額に見込まれる経費の調達に苦しむ藩財政の状況を、藩勘定奉行のもとで「おかね」即ち諸経費の支出を実際に扱う御金奉行が具体的に述べていて、興味深い。

さらに第四の斉昭書翰一点は、宇和島山本家所蔵のものである。同家の夫人は、安政大獄に連座した宇和島藩士吉見長左衛門（左膳）の子孫にあたる。吉見はもともと藩士中井家の生れであるが、幼時に吉見家を嗣いだ。安政五年十

一月二十一日江戸で捕えられ藩預りとなり、翌六年十月二十七日に「重追放」となる。退隱して伊能と姓を変え、永憲と名のり、永錫・友鷗と称した。文化十四（一八一七）年十一月十七日生れで、明治八年四月三十日五十八歳で病没。伊能姓は、藩主宗徳が、「伊達家の能ある臣」と称え、そのように命名したとされている（宇和島大超寺の墓碑々文、伊達宗徳篆額、明治三十七年建立）。

なお、山本家には「安政五戊午歳十一月廿一日起 日記 永憲」と表紙に記した、吉見自筆の日記一冊が残されている。十一月二十一日江戸町奉行石谷因幡守与力等の訪問を受け、呼出されて尋問されることから始まり、安政六年十月二十七日「重追放」となり、その請書を出した写しまでを載せており、取調べを受けている期間のものである。後年この日記を手にした晩年の伊達宗城が、往時を回想して旧懐の思い止み難く、その横半帳の表紙に「回顧往時三十餘年、感情之横胸裡、未閤記事、涙滴々、明治廿四年十月廿一日燈下、南洲誌」と書き加えている。この「日記」については別稿を期したい。

そして最後に、前号の「菊池為三郎重善（三左衛門）関係史料について附言しておきたい。東京大学史料編纂所編刊の『大日本維新史料類纂之部 井伊家文書』第十五卷（一九八七年二月刊）に、井伊家所蔵の安政大獄関係者の吟味取調書の中、梅田雲浜への尋問書の中に菊池為三郎の名がさかんに登場している。それによると、雲浜（源次郎）の接した水戸藩士の中で、菊池が重要な役割りを果たしていることが推測される。菊池が斉昭の致仕後宇和島にのがれたことは、これまでも見た通りであるが、幕府も菊池と雲浜の関係について種々尋問を行っており、菊池から雲浜に斉昭や藤田東湖の著作類が渡されたことがあることや、菊池の宇和島潜入時代の変名多田慎之助署名の梅田雲浜宛の書状（嘉永三年）などが記録されている。この辺の志士間の連関については、更に別稿を期したい。

補遺 (1) 天保末年の、徳川斉昭と伊達宗紀の往復書翰

本稿は、第一回（本誌「第十号」）以来、弘化三（一八四六）年の、斉昭と宗城の間の往復書翰から出発した。まずここにまとめた一点は、それ以前、天保十一（一八四〇）年から、弘化元（天保十五、一八四四）年に至るもので、水戸徳川家の彰考館文庫所蔵の「御書留」（第三一号ノ二）から抜いたものである。他に三点ほどは、既に掲載してある。「子」年から「辰」年、すなわち、天保十一（一八四〇、子）年から弘化元（天保十五、一八四四、辰）年までの、尾張公（徳川斉荘）、讃岐守（高松藩主松平頼恕、斉昭実兄）、右京大夫（久保田藩佐竹氏か）、松平越前守（松平慶永）、播磨守（常陸府中藩主松平頼繩）、真田信濃守（幸貫）らに宛てた斉昭書翰の控えや、彼等からの書翰の写し等、約一〇〇点が収められている冊子からの分である。同じ彰考館所蔵の「書留」類（書翰の写しや控の留書）で、先に利用した「（御書留）嘉永庚戌（三年）」（第三一号ノ六）と一群を成すものであるが、ここに「補遺」とするものは、年代的には天保末年から弘化初年にかかるものであり、従って「弘化三年」のものから始めたこの往復書翰集に先立つものであるとともに、伊達宗城の養父宗紀との関係の多い。

一四六、天保十一年二月 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

* 「御書留（子）・丑・寅・卯・辰」の2、水戸彰考館所蔵、第三一号ノ二

如示教、改暦之吉瑞御同意愛度申納候、弥御無異御越年之由、珍重之御事ニ奉存候、拙者去月廿五日遂就国之素願、^①尚々依旧令清光候、乍慮外御省慮可給候、天涯頗寒氣御念入候御事と心得候、右御報、早々猶期後春候也、不備

二月

二白、御端書別而御懇篤令感謝候、弊藩も春寒殊ニ料峭々々、御在国如何、折角御自愛專一二奉存候、下国以来国事紛雜と見へ候、以上

遠江守殿^③

水戸

御報

① 斉昭就藩 天保十一年正月、斉昭は、願の通り帰国して水戸に入る。それは正月二十五日のことである。

② 遠江守在国 当時の宇和島藩主伊達宗紀は、前年天保十年八月五日に江戸を発ち、九月七日宇和島着。当十一年三月十一日に宇和島を發つまで、在国。従つてこれは、水戸から宇和島へ送られた書状の控。

③ 遠江守 宇和島藩主、伊達遠江守宗紀。宗紀は宗城の養父。宗城は、文政十二（一八二九）年四月十三日、伊達宗紀の養嗣子となり、六月に、諱を宗城と称した。その後天保五（一八三四）年十二月十六日、從四位下に叙し、大膳大夫に任ぜられた。十七歳であつた。翌天保六年五月二十九日、藩主宗紀に代つて初めて宇和島に入国着城している。弘化元（一八四四）年七月十六日、封を襲いだとき、遠江守と称した。宗紀はその時の致仕によつて遠江守を改めて伊豫守と称したので、これらの書翰の天保年間の「遠江守」は、伊達宗紀であり、天保十四、五年に「大膳大夫」とあるのが宗城である。

内容 一、年始状への返信

一、去月（天保十一年正月）二十五日、かねてからの帰国就藩願いを達成し、水戸へ着、祖先の墓に詣る。なお同十四年

三月の、將軍日光社參隨行のための出府まで在国する

一、寒氣見舞

一、斉昭下国以来、国事紛雜となる

（参考書翰）一四七、天保十一年六月二十七日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

* 「御書留、（子）・丑・寅・卯・辰」の21、同前

(1)

奉謹呈候、辰下嚴暑之候御坐候処、先以閣下益御安泰可被為在御興居、恐悅之至奉遥賀候、其後御呈書も相怠、不本意恐懼候、今年ハ、御願之通御帰国被為在候由、萬端国事差図も御行被為屈、萬民可奉謹戴、国家之大幸、乍憚奉存上候、將亦、過月ハ、御館御炎上之趣奉承知、奉驚愕候、彼は御配慮可被為在、奉恐察候、御帰国後ハ、文武御世話共被為在、御備も御届候由、奉伺度相成義ニも御坐候得は、御備之御次第奉伺度候、後学之一助難有幸奉存候、宗紀三月十一日弊邑発足仕、四月廿一日着府仕、其後參勤御礼も、無滞申上難有奉存候、当年ハ、海上雨勝ニ而船中不任心候故、延着ニ相成、其上道中出水、川支等ニ而、不得止相滞、例歳よりハ遲着仕候、梅雨前後共降続、此節も日々雨勝、冷暖不一時候、何卒光暑相待候、快晴奉祈候、如当季ニ而ハ、秋熟不安心かと奉存候、此節相變義無御坐候得共、時下奉窺尊體度、奉呈愚翰候、閣下侍臣宜御執直可被給かと奉存候、恐惶頓首、不一

六月廿七日

二伸、為民社、乍恐御自愛被為在候様奉存候、不備、謹言

閣下呈上

藤 宗紀

(2)

別紙ヲ以奉拝呈候、乍恐奉窺 御容體候驗迄ニ、弊邑之疎品奉拝上候、御一笑被成下候得は、辱仕合奉存候、猶書外期後音可奉申上候、閣下之侍臣宜敷奉希候、謹言、以上

六月廿七日

拝上別紙

宗 紀

- ① 本年御帰国＝前号書翰の、斉昭の天保十一年の帰国就藩
② 御館炎上＝天保十一年五月二日、江戸小石川の水戸藩邸火災
③ 帰国後の文武の備え＝天保十一年正月に帰藩した斉昭は、甲冑標幟制改革、大砲鑄造、追鳥狩の挙行、造船計画等々、次々と「軍制」改革を推進する。

④ 宗紀出府＝天保十一年三月十一日宇和島出発（「伊達家御歴代事記」巻之三十四、第七代宗紀公）

内容 一、斉昭帰国しての国事の行届くを悦ぶ

一、とくに水戸の文武の充実の由に敬服、後学の為にその経緯を伺わん

一、伊達宗紀参府の模様、道中の難儀

一、時候不順の見舞

一、（別紙）時候見舞に領国の産物を贈る

一四八、天保十一年七月 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

* 『御書留（子）・丑・寅・卯・辰』の23、同前

朶雲披見、時下溽暑、御着府以来、起居萬福重疊令抃悦候、拙子就藩以後、如旧令消光候、御休意可給候、春来季候不順ニ而、今ニ苦心候処、五六日以来相応之光熱ニ相成候得は、奥_ニ而は秋田も大ニ熟、此通リニ候得は、四五分位ニは秋取も可有之哉と、少し胸懷を憾し候、何も相応相欣候儀に御坐候、都下季候如何、不相替御懇御事、縷々御示教之趣、尚又御封産之佳麵御投贈、御厚誼令感謝候、委曲可為御答候処、（繁）国事般雜之上、加之祝融など之災厄に而、尤一層之繁刺を生し、先は序迄早々、他ハ期後信候、不備

七月 日

徳川斉昭と伊達宗城（十二）——河 内

二白、順時御自愛專一奉存候、此一品、弊邑之産ニ候間、乍鹿物懸御目申候、御一笑可給候也

遠州 殿

水戸

御報

内容 一、齊昭引続いて就藩

一、春以来の不順、ようやく時候回復、秋作の見込みも立たん

一、縷々の教示を謝す

一、領国（宇和島）産の麵への礼

一、国事繁雜、大火も受く

一、自国産の「簀品」を贈る

一四九、天保十一年十二月 徳川齊昭書翰、伊達宗紀宛

* 「御書留（子）・丑・寅・卯・辰」の38、同前

如示諭漸寒、仍御多祥御起居之由、令抔賀候、拙子無事在藩、乍慮外御休息可給候、遠路御尋問、殊ニ嘉品御投惠、多謝之至ニ候、扨拙作短刀之儀致承知居、就藩後驗見書ニ三試鍛鑿致候所、何レも長刀ニ出来、御好とハ齟齬致候所、右ニ而も先懸御目可申候得共、最以不出来、心ニ応し不申候故、又々御好之通、新鑿ニ致し候、段々御答も及延引候、何レ来春新鑿懸御目可申候、先ハ兩度之御答、早々不備

十二月 日

二白、順時為國家御厭專一二奉存候、来年も在藩ニ付、縷々示諭之趣令多謝候也

遠江守 殿

水戸

御報

① 齊昭在藩 天保十一年八月、齊昭は今後一年間の在藩延期を幕府に要請、許される。

内容 一、齊昭引続き在藩

一、拙作短刀、さらに作り直さん

一、来年も在藩の予定

一五〇、天保十三年九月二十九日 徳川齊昭書翰、伊達宗紀宛

*『御書留 (子)・丑・寅・卯・辰』の78、同前

嚴霜之候、仍御多祥御起居之由、令抃賀候、拙事無異致在藩候、乍慮外御省意可給候、如示諭、当年関東筋豊穰之由、弊
邑など、風雨之妨も無之よし、寛々在藩致候而も、苦心不絶、空く過駒隙候、御一笑可給候、幕府文武之御世話は勿
論、沿海ニ不限、武備嚴整之御触等も有之、重疊令恐悦候、併異船打拂之事御止ニ相成候事ハ、誠遺憾不驚入候、将
又御在国之名産、被懸芳意、毎度御厚誼令感謝候、右御答迄、早々、他ハ期後音候、不備
(マツ)

九月廿九日

二白、時下漸寒、為国家折角御自愛專一二奉存候也

遠江守殿

水戸

御報

① 齊昭在藩 本号書翰一四六にみる如く、天保十一年正月帰藩(水戸家の場合、定府であり、国元に赴くことが異例のため、
「就藩」という)して以来、はじめは在藩延期を申請して許されたが、そのまゝ出府を指留められている齊昭を早く江戸へ
戻したいと考えていた老中太田備後守資始は、天保十二年六月三日辞職する。長期にわたる在藩の「許可」を、齊昭や水戸
家では、老中水野の策略と受けとっていた(『水戸藩史料』別記卷四)。

徳川齊昭と伊達宗城(十二)——河内

② 異国船打払停止 天保十三年七月、幕府「天保改革」の、いわゆる「薪水給与令」

内容 一、関東筋豊作の由

一、斉昭の在藩長期間に及ぶ

一、武備強化、沿海警備の幕府施策を悦ぶ

一、しかし、「薪水給与令」は納得いかず

一、国産の名品を謝す

一五二、天保十四年正月十五日 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

* 『御書留 (子)・丑・寅・卯・辰』の80、同前

新禧申納候、何も無異御越年候半、如之奉存候、客冬ハ縷々御配意御念入之儀、殊ニ佳品遠路御投贈、毎度御厚意、令感謝候、将又、罷虜防禦云々、示諭之趣、御尤ニ奉存候、先ハ兎角秃筆之所及ニ無之候条、兎角期面晤候、早々不悉

上元^①

二白、時下春寒、為国家御自愛專一ニ存候也

遠江守殿

① 上元 正月十五日

内容 一、旧冬の諸配慮(未詳)と惠贈の品への礼

一、伊達宗紀の「罷虜」(ロシア)防禦論に同感

一五二、天保十四年三月二十三日 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

*『御書留 (子)・丑・寅・卯・辰』の82、同前

暖和之候、仍御多祥雀躍之至ニ存候、小拙子無恙致着府候、就夫示教之趣、殊ニ御在国之御名産、被懸御芳意、毎度入御念候事、令感謝候、尚期面晤候、不備

暮春念三

二白、隨時御自愛專一二奉存候也

遠江守殿

水戸

貴報

① 齊昭着府ニ天保十一年正月水戸に帰つて以来、帰府を抑えられていた齊昭は、天保十四年四月の將軍家慶の日光社參に隨行するため、三月十八日に江戸に戻つた。四月十七日に日光に詣でて、二十三日に江戸に戻り、六月十八日に再び水戸に帰国

内容 一、齊昭歸府の報告

一、字和島名産品惠贈への礼

一五三、天保十四年八月 徳川齊昭書翰、伊達宗紀宛

*『御書留 (子)・丑・寅・卯・辰』の91、同前

朶雲披見、新迄天涯如何、先日ハ御就藩愈御起居萬福欣抔之至奉存候、拙子劣々依旧候、乍慮外御省慮可給候、如示諭、先達而ハ異論望外之至ニ見得居、不堪感佩候、将又、拙書御好幸任御懇意、乍誠禿毫、拝儀いたし候、御一笑可給候、先ハ御報迄、早々不備

八月

時下秋爽、御自愛專一二奉存候、如諭夏時不順之氣候、初秋以来残光愚散候、弊邑坏、若々半取りニも可相成哉と、

徳川齊昭と伊達宗城(十二)——河内

心を苦居候也

遠江守殿

水戸

御報

① 宗紀就藩 天保十四年は、宗紀は帰国の年で、六月一日に江戸を発ち、六月二十九日に宇和島に到着している。

内容

一、伊達宗紀の無事宇和島帰国を賀す

一、宗紀の「異論」の提示を謝す

一、自分の揮毫を贈る

一、秋冷にて不作、自領は半作ならん

一五四、天保十四年九月二十九日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

* 『御書留 (子)・丑・寅・卯・辰』の92、同前

示教、時下冷爽、起居健勝、令雀躍候、出府中於宮中得面晤、大悦不斜候、今節秋暑来候得共、猶後候得者、諸国之秋成者、三伏不順故、弊邑杯半作ニも至り兼可申哉相聞申候、扱又、幕府御新政追々承り申候、諸有司も望配置

を、各得其職候事と奉存候、然し上地一条、示諭之趣、御大政之御深意ハ、拙子杯孤陋に而、中々相分り兼申候、御武備之事、良策ニ可有之候得共、拙家杯江施候ハ、数世之後、萬一弊風ニも相成候節ハ、自然と勝手へ入候様にも可相成哉、やはり大小犬牙にても可相成候、将又、御在国之名産御投贈、令感謝候、先ハ御礼迄、早々不備

暮秋小安日

九月廿九日

二白、隨時御自愛專一奉存候、此鰯、且銘候へ共、弊邑之産故、令附致候也

大膳大夫殿

水戸

御報

① 出府中面晤〓齊昭是天保十四年、水戸から江戸に戻り、將軍日光社參に隨行、六月十八日に再び水戸に帰國、その間伊達宗城に會った。

② 幕府新政〓天保十二年五月十五日に始まる老中水野越前守忠邦の幕政の天保改革

③ 上地一条〓老中水野忠邦が、天保十四年九月四日に發した「江戸・大坂最寄一円御料所に成し置かるべく」という「上知令」、反對者多く、同閏九月七日停止となり、閏九月十三日に忠邦は失脚する。

内容 一、當中での面會を悦ぶ

一、三伏（夏至から立秋）頃の不順で、半作ならん

一、「幕府御新政」の体制を諸有司も歡迎

一、しかし「上知令」はその趣旨納得出來ず

一、武備の策は良策と考えられるも、先行き疑問点あり、財政の負担にもならん

一、自國産の品（鰻〓えび）を贈る

一五五、天保十五年（正月カ）八日 徳川齊昭書翰、伊達宗城宛

* 『御書留（子）・丑・寅・卯・辰』の98、同前

（上部欄外註記）「是より辰年か、此年月ハ察しなり」

新禧申納候、御多祥御越年之由、抹賀之至、爾來息へも久絶音問候、扨ハ改稷之儀復旧、一統安堵、喜悅之由云々、^①
本來ハ行難き段、務初より不致方可然哉、禁令も時々繁細ニ下候由、拙子抔一小家之政と違、天下之大政、所已知ニ
無之、且評議之可洩事ニも無之善故、亦在藩を守り、田畑革封及文武之勉励、海衢之防衛、或ハ穢畜之佛徒を排し、

且 本朝之正道を恭奉いたさせ候様之事ニ、真ニ時日を費し申候、拙詩入附版候、更正待入候、不悉

八 日

峭寒御自愛專一ニ候、銘菓被懸芳意、感謝之至、未手元ニ參不申、不日ニ賞味候半と樂居候也

大膳大夫殿

水 戸

御報

① 改稷の復旧ニ水野忠邦の天保改革の中止のこと。

内容 一、幕政改革は当初より不安あり、禁令も繁細

一、なお在藩して田制、武備等の改革を進め、佛徒の正道化などを進めん

一、諸作詩出版のつもり

一、銘菓惠贈への礼

一五六 天保十五年三月四日 徳川斉昭書翰、伊達宗紀宛

* 「御書留 (子)・丑・寅・卯・辰」の102、同前

春暖之候、兎角不順候得共、先以起居萬福雀躍之至り奉存候、拙子劣々依旧候、乍慮外御省意可給候、扱ハ御国産之名品被懸芳意、遠路御懇誠之御事、令多謝候、拙毫之御謝辞不堪汗顔候、尚後音可申入候、不備

三月四日

二白、隨時御自愛專一先祈候、示諭、弊邑去年寒威緩緊交錯、春來も不見、諸作如何可有之哉、真々令苦心候、隨時御自愛專一候也

遠江守殿

水 戸

御報

内容 一、宇和島名産品惠贈への礼

一、自分の揮毫（一五三号のものか）への謝辞に恐縮

一、昨年来の寒気で春来遅く、諸作を案ず

附記 この年天保十五年（弘化元）五月齊昭致仕、七月十六日宗紀も致仕

補遺 (2) 彰考館文庫所蔵文書原本による補遺

これまで紹介した往復書翰のうち、水戸徳川家の側に記録されているものは、それを「事修叢書」としてまとめているものの中から、かつて宇和島伊達家の編輯所で筆写した写本によっていた。水戸徳川家の彰考館文庫の中には、それら書翰の原本が残されている。「烈公御筆類」とされ、その仮目録もあるが、その中の一六〇〇番台の番号の付けられたものに、伊達宗紀・宗城の書翰が含まれている。それらの中から、かつて閲覧のできたもの十数点について、これまで宇和島伊達家による写本でここに紹介してきたものとの照合を行った。ここには、その中から「補遺」として拾い出したものと、原本と写本との「差違」から拾い得たものをまとめた。原本の方は、本紙とそれに附せられていたと考えられる「別紙」がばらばらになっており、年代順にたんねんに整頓して組合せ、配列していくことは仲々困難である。その点から考えれば、宇和島伊達家で利用した「叢書」の写本は、誠に利便なものであった。一応ここには、照合し得たものの一覧を示して、今後の参考にしようと思う。

本稿での書翰番号と掲載号と(回)	彰考館文庫原本番号	備考
八(2) 第十一号(一)	一六七〇	宗城↓斉昭、八(1)の原本不明 *註(1)
一八(2) 第十二号(三)	一六五〇	宗城↓斉昭、一八(1)の原本不明
三三 第十三号(四)	一六六八	宗紀↓斉昭
三七 第十三号(四)	一六六九 一六七三	宗城↓斉昭、一六六九と同文の一六七四 あり *註(2)
三九 第十三号(四)	一六六六	宗城↓斉昭
五六(3) 第十四号(五)	一六四七	宗紀↓斉昭、五六(1)・(2)の原本 不明
六六(2) 第十五号(六)	一六七九	宗紀↓斉昭、六六(1)の原本不明

*註(1)Ⅱ八(2)の端裏封の裏に

「謹封

伊達遠江守使者

滝本六郎

百拝

*註(2)Ⅱ三七は一六六九と一六七三を一つにまとめているが、その中間に、次の一文がある。

」とある。

「一、先月廿六日蘭船入津、例之風説書、産地附等ハ家來ヘ為寫、差上申候、極密之分ハ小子寫、

内々差上候、不相替紛敷、洩不申様達し有之ニ付、御他言御断申候

さらに、一六七三の末尾に、次の一文がある。

「
」

一、右之通り、家來通詞より極密さくり出し、聞書ニ而申出ニ付差上候、必ス御他言無之様奉願候、右ニ付、色々愚説候得共、何分用向多く、閑暇も致出来候ハ、可申上候、当年ハいまた此秘事か御承知無之奉存候ニ付、大乱書ながら写申候、落字多可有之候也

初秋十二日

「

一五七、年月日未詳、伊達宗城「綿薬法」

*彰考館文庫「烈公御筆類」一六二二号、原本

綿薬法^①左ニ

蘭人伝

硝石精

十部

硫黄精

六部

右能ク合和シ、清浄ナル白綿ヲ其内ニ浸入シ、暫時ニシテ取出シ、此ヲ蒸餾水ニテ洗ヒ、乾シ貯フ

又法

乾タ硝石十部、緑礬油六部ヲ以テ、合製シタル「ニットアジット」、硝石酸ノ内ニ能ク清浄ニシタル「カトウン」

徳川齊昭と伊達宗城（十二）——河内

ヲ浸入スル事、一密伊多半時ニシテ取出シ、水ニテ屢洗ヒ、能乾シ、綿布ノトケルヲ度トシ、供用ス

① 三三六（第十三号四）及び六〇（第十五号六）の宗城書翰に關係あるか。

内容 一、オランダ伝来の綿火薬製法

（参考書翰）一五八、年月未詳、二十五日、伊達宗紀書翰別紙、徳川斉昭宛

* 彰考館文庫「烈公御筆類」一六六七号、原本

乍憚、以別紙拝呈仕候、此書面手ニ入候間、内々奉呈上候、甚草々相写、恐入候得共、為相改候義も無之、人間相恐、何とも恐入候得共、此儘御内密拝呈仕候、定而、自何方歟 尊覽被為在候半哉と奉存候得共、奉差上候、殊之外之秘物之由、福岡極密差越候間、可被思召候而、何卒外へハ御断申上候、萬々來帰投可奉申上、恐々頓着

廿五日

（奥封書）
緘

別紙呈上

① 六五（第十五号六）所収）の伊達宗城書翰に關係あるか

② 福岡〓福岡藩主松平（黒田）美濃守斉博（薩摩島津重豪第九子）

内容 一、手に入れし密書面を内々呈覽に供す

一、右は黒田が極密に持参せしもので外へ洩らさざるように

(参考書翰) 一五九、年末詳、二月十三日 伊達宗紀書翰別紙、徳川齊昭宛

* 彰考館文庫「烈公御筆類」一七〇五号、原本

別紙拝呈、過日渡来船ノ風聞奉申上候所、宜ク是ハ世上之風聞而已ニ而、実事ニハ無之様子此々と行違候風聞ノ由ニ御坐候、甚卒忽之風聞奉入 尊聴、恐入奉存候、此段申上奉り候、其内当年ハ少分ハ出来兼候様、推察仕候、先ハ御内々奉申上候、已上

二月十三日

(奥封書)

別紙拝上

内容 一、過日渡来船の風聞として伝えしは、世上の風聞のみにて、実事に非ず、内々謝罪す。

補遺 (3) 伊達宗城と賢姫との婚儀関係史料(天保十年)

何度も述べたように、伊達宗城は、天保十(一八三九)年、二十三歳のとき、水戸徳川齊昭の長女賢姫(さかひめ)と成婚に至る筈であった。そのことは「第十号、(一)」の「四」註②などで触れてある。このことに直接関係する両家両人の間の書状はないが、その縁談・婚約は、養父伊達宗紀と齊昭との親交から生れたものであるうが、両家両人の関係にとって重要なできごとであった。前年天保九年の内に「内約」が整い、天保十年二月から両家は表立った交渉に入り、五月三日には將軍家の許可も出たが、六月五日結納の前日四日、姫の急病死で終った。その婚儀の固まるに伴っての、前年天保九年暮の、水戸家内の記録一点(二通及び齊昭の書加え)をここに参考史料として示す。

(参考史料) 一六〇、天保九年十二月 賢姫婚儀につき水戸藩御金奉行関係文書

* 彰考館文庫所蔵「烈公御筆類」、第一九五号、大横折紙二枚綴、原本

(1) 御金奉行伺書

乍恐奉申上候、去ル七日 御年寄共より達ニ、賢姫様御縁辺御内約整に付、御普請金被遣候間、両金方ニ而金貳千両指出可申候、尤当月中旬千両、殘金千両ハ来春ニて宜趣申付御座候、然ル処、是迄追々出金仕、今以御跡埋無之、誠ニ御手薄罷成、繰合兼候間、其段申出候処、恐悦之御儀ニ有之候間、是非くり合候様再三達御坐候故、不得止事、

御手元金より金貳百両指出可申哉、尤伺之上ニ無之候而ハ指出候儀不罷成旨申出候得者、伺之上、貳百両指出候様可仕旨達御座候、如何可仕候や、乍恐奉伺候、以上

十二月十四日

元御金奉行共^②

(2) 徳川斉昭下知、長尾・小原宛(行間に朱書、斉昭自筆)

賢姫縁辺内約ニ付てハ、めて度事故、是非くり合、両役所より二千金指出候やう達有之候ようニて内意承り申候との儀、何も承知いたし候処、右手元金の義ハ、家老共の手元金ニハ有之間敷候へは、一々我等へ申聞候上、達ニ可致筈の処、近頃ハ承り候義も無之、直ニ両役所へ達候義、何共不相濟事ニ御承り候へハこそ、我等了簡も各へ申聞候へとも、万一氣弱の者か、又ハ不行届者ニ候へハ、家老の申付ニ任せ、さし出候事と心配いたし候、第一、両金方の義ハ、武用の為ニ、御代々にて御貯置せられ候金子に候へハ、武用の外ハ一切指出し候てハ不相成訳ニ候へ共、帰国の入用とか、又は諸士極窮ニ付拝借申付候とか、又ハ在町救の為にいたし候とか申様の事は、全ク武備ニハ無之候へ共、国の為、人の為にいたし候義ハ、やはり武備の一ツニも相成候へ共、娘婚礼等ニ付て、大切な武備の為ニ貯置候金、一

片たりとも出候てハ決して不相成義にてハ有之間敷哉、如何存候哉、よくよく考可申、大小の相違ハ候とも、家中にて
武具・馬具等拂候て、娘婚禮の金ニいたし候ハ、賞候義ニハ有之間敷、両役所の金ハ則武器も同様ニ候へハ、武器
等出来候入用ニ出し候義ハ、たとへ万両出候とも不苦候へ共、前ニも申候通り、婚禮等の義ニ付候ては、我等へ承り
候迄ハ無之、決して出し候てハ不相成候、右金子を出し不申してハ婚禮不相成義ニ候ハ、破談ニいたし候やう可申候、
又、我等ニも不申聞、再三申聞の上、伺不申候てハ不相成段、若申候へハ、伺の上、貳百両出候やう申聞有之との
事申さハ、両役所を自分物ニいたし候扱にて、前々直筆を以下知無之候へハ、出し不申定ハ乍存、我等へ申聞候ハ、
必ス不宜と可申と存、右様の扱ニいたし候事と被存候、且又、貳百両にて相済候義ニ候ハ、両役所より出し不申候
とも、其位のふり合ハ政府にて出来不申事ハ有之間敷候へハ、かたかた決して出し候ニ不及候、当夏中も、米買ニ付、
我等へ不承さし出し、跡にて我等承り候へ共、外々の義とちがひ、人を救ひ候義故、其まゝ直筆をも下し不申候へキ
か、是以直筆にて不申遣内指出し候義は、職柄ニ無之事と存候を、又内備等の義ニ任候て、此度杯出し候てハ決して
相成、たとへ如何様ニ家老より申達候とも、家老の役人、家老の金ニハ無之候故、直筆にて不申遣内ハ決して出し候て
ハ、武用の外ニハ不相成候、非常の義に有之候て、伺之義間ニ合兼候様の節ハ、其為の武用の金故、家老等の申聞次
第指出、追而申聞候て不苦、其外の義にてハ、前々よりの定りの通り、両役所共直の下知ニ無之てハ必ス出し申聞敷、
後役の者へもよくよく申送り候やう致置度事ニ候、呉々も武用の外ニても、武備の一筋ニ相成事と違ひ、婚禮等の義
ニ付、武用の倉へ手を付てハ決して不相成、武用の金一片たり共出し候て整候義にてハ、さらさらめて度とハ我等ハ不
存候、依此段申聞置候故、以來共相心得可申、以後、幼君杯の節ニ候共、家老の指図のミニてハ決して出し申聞敷、十
五六才、廿才とも相成迄ハ、幼君の節ハ、一切武用の外出し申聞敷、廿才とも相成候へハ、当王の了簡も出、直書ニ
て下知いたし候事と存候

(3) 御金奉行請書

御直書謹而拝見仕候、御貯金之儀、御武用之外一切指出申間敷、全之武ニ無之候共、其意武備に当候ハ、指出可申旨、逐一御下知奉畏候、心得違仕、是迄不当之扱仕、甚奉恐入、後悔仕候、急度相改申候、此度之覚書、役所之々安置仕、後役之者御役成之日、拝見為仕候掟ニ仕、次第ニ宜人物拵候様、得と申送り、後世国老より不当之出金無心申聞候共、決而不指出、上意御下知に而も、万一於道理如何と奉存候節ハ、幾度も強而奉伺候様可為仕候、将又、御役金奉行共江も、御書拝見為仕候間、乍恐 尊慮 御安し可被遊候

臣長尾和郎、臣小原俊彦^③

御請奉申上候、以上

十二月廿四日

一元御金奉行共

(4) 徳川齊昭下知 (朱書、齊昭自筆書加え)

令披見候、本文之通り掟ニいたし申候ハ、たとへ後世幼君の節杯ニも、家老等の存之通りニ不相成、益貯も充滿可致候へハ、両金方とも、右之心得ニて後役へ申送り可然候、扱又、万一心得違候時ハ、貯候ニのミなつミ、武備ニ相成候事ニても出し候義をおし候様成行候時ハ有れとも、如此之貯のせんハ無之候へハ、此度をもよくよく申送り度事ニ候、是迄も、跡埋々と申候て、終ニ跡埋ニ相成候事覚不申候処、勝手不如意等故、尤ニも聞え申候へハ、跡埋の義ハしばらく催促もいたし不申候へ共、此上出し候義ハ不相成事ニ候、以後、国老等右申聞有之候とも、前文之通り可存候、依尚又申遣置候也

二白 此度の義、其まま済せ申候様ニてハ、幼君の節ハ家の心次第に相成申候故、此掟ハ決而曲候てハ不相成候故、此たん御金奉行の方へも可申置候事

十二月廿九日

元金奉行へ

① 賢姫さまか姫、斉昭女、文政五年生。天保十年五月三日、幕府の宗城との縁組許可により六月五日結納の予定が、その前日六月四日急病死。(第十号「四」書翰、註②など参照)

② 御金奉行水戸藩御金奉行。天保年間の「江水御規式帳」(茨城県筑波町、長嶋家蔵)によれば、当時の金奉行四名の名があり、水戸の二名は長尾和節(和郎)(天保六年六月任)と小原俊彦(天保七年二月任)であり、定府(江戸)の二名は柏義方(天保七年四月任)である。この(1)の中に「両金方」とあるのは、水戸と江戸の双方の御金奉行である。但し最後の江戸の清水正信は、この文書の時には未だ着任していないことになる。

③ 長尾・小原前註②参照、水戸の御金奉行長尾介五郎和節と小原忠次郎俊彦。

内容(1) 一、婚約につき、家老共より二千両の出金を求めらる。当面千両、来春千両。

一、くり合わせつかず、「御手元金」より二百両の支出可なりや。

(2) 一、「手元金」は家老共の関与すべきものに非ず。

一、両金方(水戸と江戸の双方の御金奉行)の金は、「武用」の為の貯えなるも、国の為、人の為には使うべきもの。

一、婚礼には一片も出すべからず。

一、金子なくば婚礼相成らず、とならば破談にすべし。

一、二百両程度ならば、政府で才覚せよ。

一、将来の嗣子問題などのことを考えよ。

(3) 一、「御直書」(本号(2)の斉昭下知)の趣旨、謹承す。

一、心得違いの伺いを詫び、この趣を後役にも伝えん。

(4) 一、今日の下知を、将来の「掟」にせよ。

補遺 (4) 宇和島山本家文書より

一六一、安政二年（カ）正月九日、徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

* 宇和島市山本友一・登美子家文書 ① 原本、状

（斜包紙）
「遠州殿」

参

┌───┐
└───┘

水 隠士

如諭元正、乍然行宮之新春、未可賀候、無御恙御越年、降心いたし候、愚老劣々加齡、鶴肉御投惠、令多謝候、右御答旁如此候也

正月初九

水 隠士

遠州殿 ③

御報

二白、御別紙披誦、近々豚兒大和来候故、委細口頭にて同人より可及御答候

① 山本登美子氏（友一氏夫人）は、安政五年十一月二十一日に捕われた「安政大獄」連座の宇和島藩士吉見長左衛門（左膳、のちの伊能友鷗）の養嗣子永成の孫にあたる。

② 行宮之新春に駒込邸での新春の意味であろうが、安政五年七月五日、徳川斉昭「急度謹」の処分を受けた後の「安政六年」とするのは、嚴重な監視下などから無理である。

③ 遠州に遠江守、内容等から考えて伊達宗城であるが、宗城は安政五年十一月二十五日に致仕して、封を伊達宗徳（大膳大夫、そのときから遠江守）に譲り、「伊豫守」となる。従ってこの書翰は、安政二三年のものであろう。

④ 豚兒大和守に斉昭八男八郎麿、昭融、川越藩松平家の誠丸（典拠）養子となり、直候。安政元年十二月十六日封を嗣ぎ、同日、侍従、大和守となる。

内容 一、年始状、しかし「行宮」の新春で喜びは少なし

一、鶴肉惠贈の礼

一、息大和守直侯近日来るべし。別紙（所見なし）の件は同人より返答させん。

小結と今後の課題

天保期から安政五年に至る約二〇年間の徳川斉昭と伊達宗城の二人の人物にかかわる、相互の交信とそこから展開される水戸藩と宇和島藩の相互の關係について、残存する史料に即して触れてきた。その間提起することのできた問題は決して少なくないが、それぞれ十分に掘り下げることは不十分のままであった。

そもそも、幕末維新期の政治史に限定しても、未公開、未公刊の史料群が依然として莫大に存在する状況は否定すべくもない。その中で、戦前から戦時中にきわめて「着実に」、緻密な作業を積み上げてまとめられた各大名家の編さん事業の成果、すなわち「家史稿本」などが、この十余年間をみても、次々と公刊されて陽の目を見、学界の共有財産ともなつて、「史料」としての利用が可能になつてきていることを悦びたい。鳥取池田家の『鳥取藩史』、そして最近一九八七年秋から公刊の開始された『池田慶徳公御伝記』、鹿児島島津家の『忠義公史料』や『斉彬公史料』、土佐山内家の『歴代公記』の「豊信公記」などの幕末部分、等々を挙げることができる。又これらの戦中までの仕事の公刊は、それぞれ地元の県など公共機関ないしはその援助を受けて組織された機関などに引継がれて進められていること、或いは、山内家の場合のように、浄書された「稿本」を影印によつて出版することで、組版と校正の手間を省き、その原文のまゝに迅速に出版できる方法を採用するなど、「ともかくも自由に見たい」という期待に応える手段と方策が工夫されていることは重要な点である。

しかしそれでもなお残る、細かい原文書類が極めて多数各家に存在することは確実に想像できるし、それらは未刊のまゝであることはもちろん、簡単に閲覧できるような状態に整理されるところまでも行かぬまゝに「埋もれて」い

る状況にあるとも、又確實に推測されるのである。

私が幸いに閲読と利用を許された宇和島伊達家の幕末維新期の文書群の中でも、すでに十年以上も続けてその解読を続けて来たこの書翰等は、実に全体のうちの、それこそ九牛の一毛にすぎない。政治史的には世の中のトップクラスの中にあつて、その思想と行動が内外に大きな影響を与えた「有名人」、すなわち当時の有力大名や公家等々にかゝわる細かい書翰は、この兩人両家に限つてみても、当然一方が他方へ、そして他方が一方へと送り合つた相互の家に残るばう大なものがあり、これらはほんの僅かな一部分である。宇和島伊達家の宗城に宛てられて同家に今日残る書翰類は、斉昭の他に、越前の松平慶永（春嶽）、薩摩の島津斉彬・久光・忠義、一橋慶喜、土佐の山内豊信（容堂）福岡の黒田斉溥などの「有力大名」、近衛忠熙・忠房、柳原前光、三条実美、岩倉具視、久世通熙らの公家、さらには宮家、僧侶等多数に亘っている。それら個々一つ一つの文書＝書翰等は、解読し、相互の関連にメスを入れつつ、縦横の関係を解明して、例えば編年体に編纂していく緻密な作業によって、初めて「史料」となり可能性が具現する。そのような「基礎的」な作業こそが、歴史研究の「基礎」でもあり、実はそれが「核心」でもある筈である。

伊達宗城にとつても、安政五年までの徳川斉昭との交信は、例えばいわゆる「一橋派」の大名たちの中で考えても、ほんのその一部分である。やはり安政五年七月に謹慎処分を受ける松平慶永から宗城に宛てた同じ時期までの書翰も、百数十点に及ぶ、それは又、斉昭との交信とも関わる内容を、当然に多く持つ。

いわゆる幕末の「四賢侯」といわれた松平慶永・島津斉彬・山内容堂、そして伊達宗城の四者の中で、宗城に直接かわかる書翰等の史料が、例えば越前福井藩の『昨夢紀事』など、そして薩摩藩の『島津斉彬文書』・『忠義公史料』等々の、既に公刊された史料記録の中には見出されるのに対して、それらを受けた宇和島伊達家側の、つまり伊達宗城に宛てられた、他の例えば「三賢侯」の書翰類が、十分明らかにならないという状況にこれまでであつた。本稿も、

その欠を埋め、各方面からの期待に少しでも応えるべく続けられて来たが、ほんのその何百分の一かの部分をかいま見るにとどまっている。

幕末政治史は、まだまだトップレベルの極めて「有能」で「活発」であつた彼ら有力者自身の「発言」そのものによつて説明されるべき事柄の多いことをあえて指摘しておこう。それは各個人を伝記的に説明することではない。やはり書き残された個人の筆跡を、政治史の直接の史料として説明していくことである。幕末政治史上の諸課題を具体的にさらに説明していくためにも、そのような細かい作業の積重ねが不可欠となる。

これまでの作業は、政治史上の「有名人」の各個人の「伝記」に関する史料にとどまらず、その主としての「藩」の動向に関する史料の解析でもあり、斉昭と宗城の關係は、いわゆる「一橋派」の大名チームの問題にもなっていく。なお引続いてこれら諸問題の一層の具体的説明を目ざしたい。

(附記) 本稿は、これまでに引続いて「昭和五十三・五十四年度文部省科学研究費・総合研究(A)」による成果の一部でもあり、さらに「昭和六十一年度同・一般研究(C)」の成果の一部にも連結している。記して謝意を表したい。

(一九八七・十・八)